自己を高める音楽科授業づくり

―第２学年「リズムにのって」の実践―

真　田　美智子

１．本主題における研究課題

いかに児童が上手に音楽表現をしても，児童自身が学習した達成感や喜びを感じていなければ，児童自身の学習とは言えないのではないだろうか。学習は児童自身のものである。学習を通して，児童が「楽しかった。」「もっとこうしたい。」などと，達成感や喜びを持ちながら次へのめあてが生まれる学習のあり方を本主題の実践を通して考えていきたい。

本主題の実践における研究課題は，次の通りである。

一人一人の児童がめあてを持って自分の力を発揮しながら，互いにその音楽性を高め，学習の達成感が成立する授業構成と評価のあり方

↓

学習過程	構成上の留意点
①めあてを持つ。	○意欲に支えられためあて ○楽しさや具体性のある教材や発問の工夫
②めあてを追求し高め合う。	○一人一人の学習活動の場の保障 ○量的，質的個人差に対する配慮 ○安心して表現し合える個と集団 ○めあてにそった音楽性を高める学習活動の展開
③振り返る。	○児童自身のための評価活動 ○個々の活動の承認 ○活動の継続や方向付け ○教師の指導の評価

２．主題「リズムにのって」の目標と指導計画

(1)　主題「リズムにのって」

低学年の児童は，自ら体を動かすことを喜び，また，リズムから誘発される動きに身体的な快さを感じ，リズム感覚が最も発達する時期にある。本題材では，曲の気分を感じ取って，歌ったり聴いたりしながら手や楽器でリズムを打ったり，合奏をしたりすることを通して，拍の流れやフレーズを感じ取って表現する力を育てることをねらいとしている。教材曲としては，「山のポルカ」（芙龍明子作詞，チェコスロバキア民謡），「かじやのポルカ」（ヨゼフ　シュトラウス作曲）を中心とする。

「山のポルカ」は，軽快なポルカのリズムを持つ旋律で，原曲はチェコスロバキアで歌われている民謡である。また，旋律は，♫♩｜♫♩｜♫♫｜♩𝄾‖のリズムですべて構成されており，歌いながら手拍子を打ったり体を動かしたくなるようなリズム感を持っている。

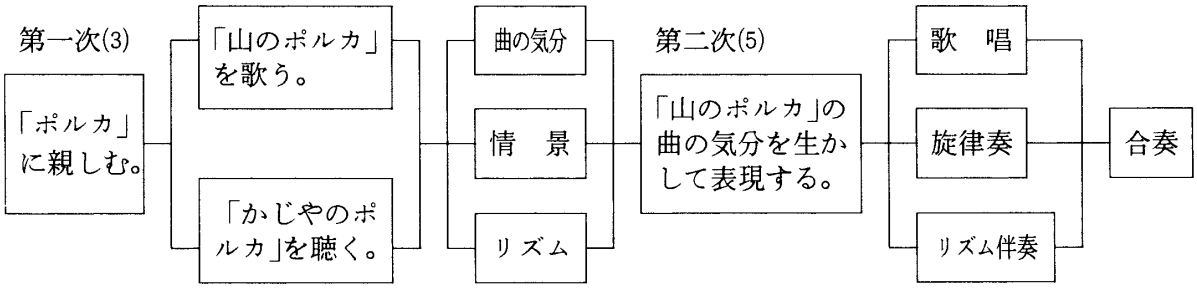
本学級の児童は，歌唱や身体表現，楽器遊びなどの表現活動を楽しんできている。また，簡単なリズム模倣等のリズム遊びを繰り返し行ってきた。拍の流れにのりにくい児童が見られるが，抵抗感の少ない楽しい活動を積み重ねることによって個々の児童の表現力を高めていきたい。また，リズムの視唱や視奏等を通してリズム譜にも慣れさせ，視覚の面からも音楽に親しませたい。

(2) 指導目標

① 拍の流れやフレーズを感じ取って，曲の気分を生かして表現する能力を育てる。

② 拍の流れにのったリズム打ちや合奏の楽しさを味わわせる。

(3) 指導内容と計画 …… **8時間**



また，本主題では，リズムへの意識化を図るために，学習過程にリズムあそびを位置づける。手拍子，足拍子，ひざ打ちなどを使って身体全体でリズムを感じ取らせていきたい。

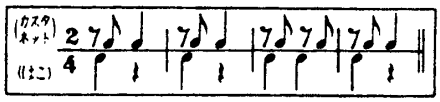
3．リズム伴奏と自己を高める授業構成

(1) 授業構成の視点

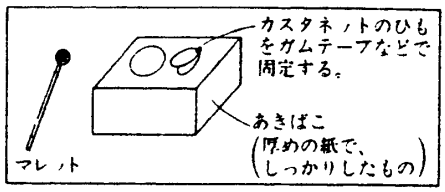
①めあてを持つ。	曲の感じに合った抵抗感の少ないリズムや楽器を提示する。
②めあてを追求し高め合う。	互いの表現を聴き合える学習活動を工夫する。 ・一人一人の活動の保障 ・聴き合う場の設定 ・児童の活動への教師によることばかけ・助言・賞賛
③振り返る。	学習の終末に気付きや思ったことを発表し合う場を設定する。 ・児童の振り返ったことの把握 ・個々の児童の活動の承認 ・次の活動への方向づけ

本主題におけるリズム伴奏は，２種類の音の楽しさを味わえるリズムバッテリー奏をする。楽器としては，大太鼓と小太鼓のような楽器の組み合わせが考えられるが，二人でリズムを分担して表現することより，一人でバッテリリズムを表現する方が抵抗が少ない。そのため，箱とカスタネットを組み合わせた「はこカスタ」を作って楽器として提示することにした。

〈リズム〉



〈楽器〉



但し，リズム伴奏を加えた第1時間目では，楽器として，はことマレットのみを示し（カスタネットをはずして），♩𝄾♩𝄾♩♩♩𝄾のリズム伴奏をすることから学習を開始した。

(2) 指導の実際

① 本時の目標

「山のポルカ」の曲を，拍の流れにのって楽しくリズム伴奏したり，歌ったりさせる。

② 評価の観点

音楽への関心・意欲・態度	リズム伴奏や歌唱表現を楽しんでいる。
音楽的な感受や表現の工夫	曲の気分を感じて，表現しようとしている。
表現の技能	拍の流れにのって，リズム伴奏をしたり，歌ったりすることができる。
鑑賞の能力	リズムに気を付けて友だちの表現を聴くことができる。

③ 指導過程

学習過程	指導上の留意点
1 リズムあそびや「山のポルカ」を歌ったりする。 リズム模倣 ／ 歌唱 ／ ドレミ体操	1．前時までの活動を繰り返すことで，本時への意欲付けとこれまでの活動の定着を図る。また，歌唱やリズム打ちをする児童の表情や身体の動きを捉えるようにする。
2 「山のポルカ」の拍の流れにのって，リズム伴奏をする。 〈めあてを持つ。〉 リズム ／ 楽器	2．歌に合わせて，♩𝄾♩𝄾♩♩♩𝄾のリズム伴奏をして意欲化を図る。また，リズム譜も示す。楽器としては，箱とマレットを用意しておく。手拍子でもリズム打ちし，リズムに慣れさせるようにする。
3 リズム伴奏をしたり，「山のポルカ」を歌ったりする。 〈めあてを追求し，高め合う。〉 伴奏にのって歌う ／ リズム伴奏	3．歌グループ，リズム伴奏グループ，聴くクループに分かれて，交代しながら活動を積み重ねていく。それぞれ，次の観点で評価し，指導していく。 ・歌グループ…伴奏にのって楽しく歌っているか。 ・リズム伴奏グループ…出だしやリズムをそろえようとしているか。
4 本時のまとめをする。 〈振り返る。〉	4．本時の表現で思ったことや，自分や友達の表現でよかった点を発表させて，本時の学習を振り返る場とする。

(3) 指導の結果と考察

児童観察と授業記録により，授業構成の視点について考察する。

①〈めあてを持つ。〉

箱によるリズム打ちを聞いた児童は，「やってみたい。」「太鼓のようだ。」という反応を示した。リズム打ちへの抵抗はほとんど見られなかった。

②〈めあてを追求し，高め合う。〉

はじめはリズム伴奏をしたり歌ったりする活動に意欲的であったが，何回か交代するうちに表現に飽きが見られ始めた。リズムそのものが児童にとってやや容易であったことも一因であろう。児童にとって程よい抵抗感と多様な活動の必要性を感じた。また，リズム伴奏の活動に対して「よく合っている。」「ずれている。」等，リズム伴奏の正しさへの相互評価や自己評価が行われた。児童の意識が，拍の流れにのって楽しく表現することよりもリズム伴奏の正しさに強く向けられていたためであろう。歌と伴奏で合わせる楽しさを味わいながら技能を高める活動の場の工夫が必要である。また，聴き合う場で「持ち方が違う。」とマレットの持ち方にこだわる児童が見られた。楽器を提示した時にマレットの持ち方を指示したことが，児童の意識を音のきれいさより持ち方に傾けたとも考えられる。

③〈振り返る。〉

「○○くんのマレットの持ち方が違っていた。」「伴奏がずれる時があった。」「伴奏にくらべて歌声が小さかったのでもう少し大きめにしたらいい。」等の気付きが発表された。本時のねらいにそって，リズム伴奏をしたことで児童が楽しくなったかどうかに視点を当てて評価していく必要がある。

これらの点を生かし，次時の計画を修正し指導に当たった。

(4) リズム伴奏・第２時の指導の実際

① 本時の目標

「山のポルカ」の曲を，拍の流れにのって楽しく歌唱や合奏をさせる。

② 評価の観点

音楽への関心・意欲・態度	歌唱や合奏を楽しんでいる。
音楽的な感受や表現の工夫	曲の気分を感じて，表現しようとしている。
表現の技能	拍の流れにのって，歌唱や合奏（リズム伴奏・旋律）ができる。
鑑賞の能力	リズムに気を付けて友達の表現を聴くことができる。

③　指導過程

学　習　過　程	指　導　上　の　留　意　点
1　リズムあそびをしたり，「山のポルカ」の歌唱や旋律奏をする。 リズム模倣　歌唱　ドレミ体操　旋律奏	1．前時までの活動を繰り返すことで，本時への意欲付けとこれまでの活動の定着を図る。また，旋律奏は，フレーズごとに分担奏をして，聴き合って分担する楽しさを味わわせるようにする。
2　「山のポルカ」の拍の流れにのって，リズム伴奏をする。 〈めあてを持つ。〉 バッテリーリズム　楽　器	2．楽器として「箱カスタ」を用意し，バッテリーリズムを示す。マレットの持ち方は，自分が打ちやすい持ち方をするよう助言する。 バッテリーリズムは，手拍子と足拍子に分担して慣れさせるようにする。
3　歌唱・旋律奏・リズム伴奏等をして，楽しく合奏する。 〈めあてを追求し，高め合う。〉 歌　唱　旋律奏　リズム伴奏	3．歌，鍵盤ハーモニカ，リズム伴奏の3つのグループに分かれ，交代しながら活動を積み重ねる。 伴奏の拍の流れにのって，楽しい感じで合奏しているかについて，評価していく。
4　本時のまとめをする。 〈振り返る。〉	4．本時の表現で思ったことを発表させて，本時の学習を振り返る場とする。

(5)　リズム伴奏・第2時の指導の結果と考察

児童観察と授業記録により，授業構成の視点について考察する。

①〈めあてを持つ。〉

「はこカスタ」とバッテリーリズムを児童に提示したところ，「ドラムみたいだ。」という声があがった。「はこカスタ」は，「はこカスタドラム」と名付けられることになった。
バッテリーリズムは，程よい抵抗感があったようである。児童の中には，楽器の置き方を工夫して，伴奏のしやすさを考える児童も見られた。

②〈めあてを追求して，高め合う。〉

「はこカスタ」を5個用意していたので，交代しながらリズム伴奏をしていった。はじめのうちはリズム打ちの音ばかりが響き，それにのって表現することよりも，リズム伴奏をしている児童を注目することがほとんどであった。2，3回交代すると，次第に伴奏のリズム

や音に慣れてきた様子で，歌ったりいっしょにリズムを打つ児童が見られてきた。また，「鍵盤ハーモニカでも合わせたい。」という児童の声も聞かれた。そこで，鍵盤ハーモニカによる旋律奏を加えたり，１番や２番の歌詞で口達するなどして，多様な活動を積み重ねてよりよい表現にしていくよう工夫した。前時にくらべ，バッテリーリズムの抵抗感と多様な活動により，楽しんで表現していた。

③〈振り返る。〉

「今度は，はこカスタドラムではない楽器でもリズム伴奏をしてみたい。」「楽器を作ってみたい。」「合奏をしていると，だんだんリズム伴奏や鍵盤ハーモニカがはやくなってくることがあるので気を付けたらいいと思います。」「楽しかった。」「むずかしかった。」などの児童の思いが発表された。気を付けたいこと，楽しかったこと，次にやってみたいことが表れていた。

４．自己を高める教師の指導と評価のあり方

(1) 学習のめあてについて

学習のめあてが児童自身のものであることが，達成感の成立につながる。児童にとって程よい抵抗感や楽しさのあるめあてを設定することが大切である。

(2) 主題にそっためあての具体化について

１時間の学習の終末に，本時の表現について思ったことを発表させて，本時を振り返る場を設定した。その時の児童の意識を知る上では有効であった。そこから，本時の学習のあり方を評価し，次の活動のあり方を教師自身が考えることができた。しかし，児童自身が達成感を持ち，次へのめあてを生む場であっただろうか。「次には，楽器をつくってみたい。」等という思いも発表されたが，本主題では行わなかった。児童の思いをきちんと受け止めていくことが必要である。